学校だより　1月号

相模原市立二本松小学校
2025.1.8

にほんまつ

「かしこさ」
「やさしさ」
「たくましさ」

松っ子ブログ

「教えられること」から「自ら学ぶこと」へ

校長　松浦　隆志

いよいよ令和7年がスタートしました。久しぶりに見る子どもたちの顔も、新たな決意で満ちているように感じられます。

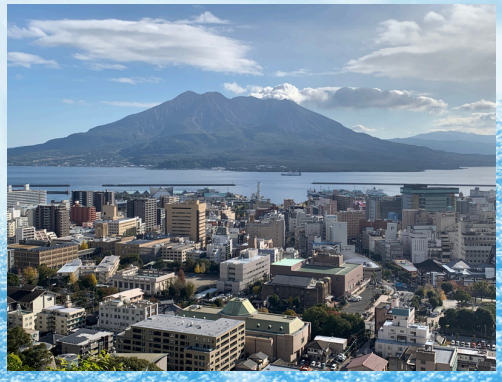
さて話は変わりますが、先日鹿児島県の加治屋町を訪れる機会がありました。この加治屋町という街は、西郷隆盛や大久保利通、大山巌、東郷平八郎等々、数々の偉人を輩出してきた土地です。十数人の生家があった場所を徒歩で回りましたが、その広さは概ね450～500m四方程度。つまり、二本松小学校がある二本松2丁目くらいの広さです。当時この街は約70戸の家しかなかったそうです。 どうして、この場所から数々の人材を輩出できたのでしょうか。

その秘密は「郷中教育（ごじゅうきょういく）」とういう薩摩藩独自の集団自治教育システムにあったと言われています。

青少年を　①小稚児（こちご）…6～10歳　②長稚児（おせちご）…11～15歳　③二才（にせ）…15～25歳　④長老（おせんし）…妻帯者に分けて、先輩が後輩に指導をします。つまり教師は存在しませんでした。「郷中教育」では、「教えられること」ではなく、自分たちで「学ぶこと」が行われていました。

そしてもう一つ特徴的なのが「詮議（せんぎ）」といわれる「討論」です。「詮議」は年長者が起こり得るが、答えのないような問を問いかけ、それぞれの意見を述べ合うというものです。例えばこのような問です。「自宅が燃えている時、自分が仕える島津藩の蔵書庫も火に包まれている。どうするか。」

しかもゆっくり考えたり、迷ったりする時間はありませんでした。「即答」を求められたのです。こうした訓練を積み重ねることによって、普段から頭を使うことを求められ、いざというときには即断即決ができるようにしていたとのことです。



さて、令和の教育はどうでしょうか。予測不可能な時代の中で生きていくために必要な力の育成、コロナ禍を通して、少し前とは教育のあり方が変わってきています。教師から一方的に「知識」や「技術」を授けることから、「自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」を育むことへとパラダイム・シフトしてきています。つまり「教師から教わる」だけの形から「子どもが自ら学ぶ」形へと、学習内容や授業形態が変化してきています。

「郷中教育」とも共通点がある令和の教育。子どもたちがこれからも成長してくことができるよう、職員一同全力を尽くしてまいります。

【連絡】
・1月30日（木）は、「小中一貫の日」で職員が出張のため、特別A4日課となっています。
全学年、給食後　13:00下校になりますので、ご承知おきください。